

木村茂雄・山田雄三 編著

『英語文学の越境』

——ポストコロニアル／カルチュラル・スタディーズの視点から』



読みつつ読まれる主体を追う

英語（英米）文学の学会発表概要を覗くと、発表者の立ち位置の揺るぎなさが滲み出るものと、自らの立ち位置への自省の念の滲み出るものが併存しているかに見えることがある。前者は悩まぬ疑似的幸福、時に安住に通じうるので、今は本書評の埒外にある。後者は、本書の編者のひとり木村茂雄の編著『ポストコロニアル文学の現在』（晃洋書房）や『20世紀英語文学辞典』（研究社）や『現代イギリス文学と場所の移動』（金星堂）を参照可能な21世紀、その数が確実に増えた。われわれは立ち位置模索の時代に入って久しい。そこで問題は研究者のよき意味での逡巡、可能性を秘めた柔軟性がいかに整理されうるかに移る。『英語文学の越境』にいくつかの答えを見た。

木村は本書中「ポストコロニアル理論とコスモポリタリズム」で「他者」という言葉の使用に際し「語るものと語られる

ものとのヒエラルキーが無自覚的に忍び」(187頁)こむ点を指摘。「権力関係」をどう「意識化」し「どう変え」るかを「新しいコスモポリタリズム」の課題のひとつとし、諸説を援用しつつ、スピヴァックの「テレオポエーシス」の概念に到着、さらに書き続けるであろうことを暗示しつつ一旦筆をおく。「〈反抗者〉の肖像」の伊勢芳夫であればこの「権力関係」も「文化的コード」のひとつに位置づけよう。伊勢は「社会を構成する成員の一人一人はその文化的コード体系の複雑な網目に強く縛られており、コードに対して疑義を感じる余地がきわめて少ない」(25頁)と警告の後、インド表象に議論を展開、イギリスの植民地化以前のインドに全インドを包括するコード体系がなかったのではと考える。上記概括的な二論文を踏まえると、これも書き手の「位置」に関わる山田雄三「ニューレフトと呼ばれたモダニストたち」の対象がイギリス1930年代を遙かに越えたものとなる。これら抽象論のダイナミズムを咀嚼後は、個別の時空を扱う細部の輪郭がさらに際立つ。

例えば加瀬加代子「ガンディーはソローを模倣したのか？」の「ガンディーは、英語の言説空間それ自体の支配性に気付き、抵抗運動の場の中心を、英語からインドの言説空間へと移し始めた」(91頁)という指摘に至るまでの手際。あるいは神田麻衣子「〈マウマウ〉戦争を語り直す」の『『デダン・キマジの裁判』に挿入された土着の言語』についての指摘。「テキストは、場所の経験が支配者の言語に咀嚼されることや、それが主流の語りによって再吸収されることに抗っている」(116頁)という一文の汎用性。むしろ古東佐知子「リチャード・ライトとブラック・アトランティック」。あの影響力に富むギルロイの「近代」に対する「二重の意識」の論点確認とライトの先

見の明についての議論も応用範囲が広い。そして‘disgrace’が南アフリカの特権階級にいた白人たち、さらにわれわれ一人一人とも無関係でないことを指摘する村上八重子「J・M・クツェー『恥辱』の隠されたテーマ」。「白人クレオールの変味で〈境界的〉な位置性」(ix)をテーマとする杉浦清文「〈幽霊〉バーサ・メイスンの喪に服すること」は、S・ブロンテ、J・リースの知名度高い作家を対象としているだけに、本書の教育現場における活用の可能性を期待させる。マリオ語・マリオ文化を対象にこの論集全体の整合性を逆に明らかにした小杉世「先住民言語教育・メディア・文学」、重要語サバルタンをすでに消化済みと見なすことに警鐘を鳴らすかの松木園久子「インド小説がもつ境界と〈サバルタン〉」も同様だ。

日本の英語文学研究が、この広大な分野の分業化という歴史的経緯を乗り越え、個々の断片にふれるのは学生のみという状況を脱するに至るまでには少し時間がかかろう。本書は対象国と日本の中に一本のやや太めの線を想定しつつ往還する作品論に代わる複数の研究の具体例を示し、その時間を早回しする。(英宝社、2010年3月、四六判216頁、2,200円)

——榎 正行 (中京大学教授)